

2022年5月教会便り 美唄～砂川

主任司祭 ナルチゾ・カバツツォラ神父

未だに新型コロナウイルスが猛威を振るっているとはいえ、典礼では、復活の雰囲気満ちあふれる中で迎える5月です。

復活の主に出会った喜びと感謝は、わたしたちに生きるエネルギーを与えてくれます。この季節は自然も応援してくれています。教会は伝統的に、この

時期に秘跡教育を大切にしてきました。そのため、この期間の福音書はヨハネの福音書が使用されてきました。また、4月に引き続き、第1朗読は旧約

の朗読に代わって使徒言行録が読まれています。平日も使徒言行録を毎日読んでいきます。この書を読んでいくと、どのように教会が誕生し、成長していったかが生き生きと伝わってきます。50日間の復活節は、来月6日の聖霊降臨で終わります。今月、忘れてならないのは、教会生活において、この月が聖母マリアにささげられてきたことです。教皇フランシスコはウクライナとロシアを聖母マリアの汚れなきみ心に奉献し、聖母の取り次ぎによる平和を求めて、共に祈ることを全世界によびかけました。

教皇フランシスコと心を合わせて聖母に祈りましょう。5月の豊かな典礼に養われながら、復活の主に出会った喜びと感謝の日々となりますように。そして、平和が訪れますように。(参考:Laudate)



5月の主な典礼・行事時刻

日	曜	典礼暦	砂川	美唄
1	日	復活節第3主日 P4 平和を願う P14 キリストの復活をたたえる	9:00ミサ 先読: 高塚 第1: 岡本 第2: 斉藤 典礼聖歌: 三上夫妻 オルガン: 多田	11:00ミサ
8	日	復活節第4主日 P14 キリストの復活をたたえる	9:00ミサ 先読: 多田 第1: 西川薫 第2: 本田 典礼聖歌: 高塚/多田 オルガン: 野呂	11:00ミサ
15	日	復活節第5主日 P14 キリストの復活をたたえる	9:00ミサ 先読: 野呂 第1: 三上朋 第2: 安藤 典礼聖歌: 野呂/古野 オルガン: 多田	11:00ミサ
22	日	復活節第6主日 キリストの復活をたたえる	P14 9:00ミサ 先読: 高塚 第1: 古野 第2: 間野 典礼聖歌: 三上夫妻 オルガン: 野呂	11:00ミサ
29	日	主の昇天	9:00ミサ 先読: 多田 第1: 室井 第2: 斉藤 典礼聖歌: 高塚/安藤 オルガン: 多田	11:00ミサ

◆平日のミサ ○砂川教会: 月曜日～金曜日 6:30、土曜日10:00 ○美唄教会: 金曜日10:30

◆今月の霊名記念日の方…おめでとうございます(敬称略)

○砂川教会	○美唄教会
1日 労働者聖ヨゼフ 続橋和弘神父・中西茂利	25日 聖マグダレナ・ソフィア・バラ修道女 東 梢
14日 マリア・ドミニカ 西亦亜希子	
27日 聖アウグスチヌス(カンタベリー)司教 鎌塚忠	

◆砂川教会 お知らせ

- ・ロザリオ会は13日(金) 午後7:00～ 信徒会室にて。
- ・22日 ミサ後にナルチゾ神父様 誕生会を予定します。
- ・毎週水曜日 10:00～ 聖書に親しむ会を実施しています。

花当番	
7日(土)	野呂
14日(土)	安藤
21日(土)	多比良
28日(土)	岡本

◆その他 8日世界召命祈願の日 22日世界広報の日(献金)

小野 忠亮

日本に貢献した宣教師アルフレド・ウット神父(旭川カトリック教会の創設者)

アルフレド・ヨゼフ・ウット神父は、明治7年(1874年)フランスに生まれた。明治31年(1898年)司祭に叙階され、パリ外国宣教会の宣教師として同年の秋、来日した。函館元町教会で日本語を学び、明治34年(1901年)から37年(1904年)まで、室蘭教会ではたらいた後、ベルリオーズ司教(本誌四月号参照)より、旭川(北海道)に教会を開設する使命が与えられ、同年、つまり明治37年



ウット神父 (1874-1956)

11月旭川へ赴任して教会を開設した。

しかし、この時は日露戦争のときでもあって、最初の4年間は1人も信者ができなかった。

巡回の範囲としては、東は帯広から釧路、西は留萌、北は稚内から網走、南は岩見沢までの広大な地域にわたっていた。

大正4年(1915年)まで旭川にあって、同教会の基礎を築いた後、同年札幌代牧区が開設され、旭川もフランシスコ会の受持ちとなったので、同地を去り、函館宮前町教会へ移った。その後、大正10年(1921年)から昭和5年(1930年)までの11年間、函館教区司教座聖堂のある元町教会の主任司祭をつとめた。

昭和2年(1927年)ベルリオーズ司教が、老齢と病気のため教区長の職を辞してから、昭和6年(1931年)函館教区が、カナダのドミニコ会に移管になるまでの4年間、函館教区の臨時教区長をつとめた。昭和6年、函館を去って京都へ行き、京都教区で宣教に従事した。昭和31年(1956年)12月19日、東京都清瀬市にある慈生会聖家族ホームで、82年の生涯を閉じた。宣教の最後の目的は、「異教や無神論のきつなで、がんじがらめにされている靈魂を、キリストのために奪いとることだ」と、ある人が言ったが、そこに反対や迫害が起きるのは当然のことである。この一例として、滝川屯田(北海道滝川市)のできごとを述べてみよう。それは日露戦争が終って間もない頃、ウット神父は、ある年若い父親に洗礼をさずけた。この人は、滝川屯田に両親と一緒に住んでいたが、カトリックに改宗したことについて、いたくその人の父親を激昂させた。その理由は、自分が仏教に確信を持っていたためではなかったが、ただ息子が先祖伝来の仏教を捨てて、キリスト教に改宗したことが気に入らなかつたのである。彼は、さんざんに息子を罵倒したのち、刀を抜いて「お前が、ヤソをやめなければ殺してやる！」と脅迫したのだった。幸いにして息子を殺すようなことはしなかったが、息子とその家族を、自分の家から追い出してしまったのである。それから数年後、この頑固な老人は一軒の家と農機具一式を買ったが、老齢のため、最早一人で耕作できなくなっていたので、追い出した息子と家族を呼び寄せることにした。息子は、その機会をつかまえて「カトリックの信仰を許すなら受けてもよい」という条件を出し、その条件を認めさせた上で家に帰った。ところがその後、弟家族と老母までが、カトリックの勉強をはじめたのである。このことで、老いた父親は再び激昂し、すっかり精神錯乱に陥り、十字架をはじめ、聖像・聖画等、カトリックに関係のあるものは、みな片っぱしから打ち壊し、破り捨てた。その上、息子夫婦と子供たちを再び家から追い出してしまった。

ウット神父がこの家に贈った聖母像(注:お恵みの聖母)も、手斧で叩き壊そうとした。しかしこのご像は鉄製なので、壊すことができなかった。そこで、このご像を火にくべ、真っ赤にやけたところを金槌で、めちやくちやく叩きつぶし、戸外に積った雪の中にほうり投げてしまった。家を出る数日前、息子の妻が何気なく窓から外を見ると、雪の中に聖母像の一端があらわれていた。彼女は喜びに心はずませながら、祖父に見つからないよう、そっと掘り出して行李の底にかくしておいた。それから5・6年たってからのこと、このヤソ嫌いのがんこ爺は、「わしも年をとり、さびしくなった。お前たちの宗教に反対しないから、孫を一人か二人寄こして欲しい」と手紙をよせてきた。これがキッカケとなって、追い出されていた息子夫婦と子供たちは、再び祖父の家へ帰ってきたのである。その後、この頑固な爺さんも教理を学び、老妻と共に洗礼を受けた。それから1年もたたないうちに、この爺さんは永眠したが、病床で寝たきりになったとき、口ぐせのように、「ああ、わしのような者をキリスト信者にしていただいて、もったいない」と、言っていたという。ロザリオを唱えるときには起こしてもらい、無理にでも正座して祈った。こうして、カトリック信者として立派な死を遂げたのである。なお、この一族からは、今は故人となった児玉三男神父をはじめ、修道士一人、シスター二人が出ており、「叩きつぶされた聖母像」は、滝川教会の宝物として、大切に保存されている。